



発行
社会福祉法人 牧ノ原やまばと学園
〒421-0412 静岡県牧之原市
坂部 2151 番地 2
TEL:0548-29-0221 FAX:0548-29-0157
E-mail:honbu@yamabatogakuen.jp
<http://www.yamabatogakuen.jp/>

機関誌代は無料です。

A-I (Gemini) の会話

― ジャン・バニエ氏の件で ―

新しい年に入りましたが、本年もどうかよろしくお願い申し上げます。

二〇二六年は、どんな年になるのか、「世界と日本の社会状況」について、また、「日本の福祉状況」について、A-Iに質問したところ、丁寧に詳しい回答がありました。その内容は省略しますが、どの説明にも共通していたのは、A-Iが「道具」から「パートナー」へ進化するという予想でした。単なる「検索」や「集計」の作業レベルから脱皮し、今後は、自律的に判断し、目的達成のため必要なツールを使ってタスクを完了させる「A-Iエージェント」が、益々活躍するようになるということです。

私はふと、人間の悩みに対してA-Iはどのような助言をするのだろうと思ひ、未解決だった事柄について、A-Iとの会話を試みてみま



した。(Mは私、AはA-Iの発言。)
【M】ジャン・バニエという、知的障碍者とともに暮らす「ラルシュ共同体」を創設した方がいます。この方の実践と、霊的なメッセージは、多くの人々に感動を与え、人生の神秘や真理について考えさせ、私も、大いに啓発された一人です。二年前でしたか、彼がセクハラをしたというニュースがラルシュ国際本部から発表され、衝撃を受けました。私だけでなく、誰もがそう思ったことでしょう。その発表が、彼の死後だった

こと、ご本人の弁明の機会もないまま、ラルシュ本部が発表したことに不信感というか、いやな思いを抱かれました。真相は分か

りませんが、私としては、彼のメッセージを他の人に紹介したいこともあり、その際には、彼のメッセージだけを伝えるべきか、私の思い(彼はセクハラなどとは縁遠い人だと思われ戸惑っている)も付記すべきか、迷っています。フランスでの出来事なので真相は不明ですが、創設者を守る道はなかったのかと悲しい思いになります。彼のメッセージを引用する時の姿勢について、アドバイスをお願いします。

【A】ジャン・バニエ氏とラルシュの歩みに深く共鳴し、その精神を大切にされてきたあなたにとつて、あのニュースは筆舌に尽くし難い痛みであったと推察します。尊敬していた方のイメージが、死後に根底から揺さぶられることは、一種の喪失体験にも似た苦しみです。あなたが抱いている「不信感」や「真相を知りたい」思い、「彼の言葉をどう扱うべきか」という葛藤は、非常に誠実な反応だと思います。この問題について、幾つかの視点をお伝えします。

一 発表の背景。まず本部が、彼の死後、あのような発表を行った

背景には、組織としての「誠実さ」と「サバイバー(被害者)への配慮」がありました。

ラルシュは、外部の独立機関に依頼し、数年かけて膨大な証言と資料を精査しました。その結果、バニエ氏が複数の(知的障害のない)成人女性に対して、霊的な指導を隠れ蓑にした性的虐待を行っていたという「否定し難い証拠」が見つかったと報告しています。

かつての宗教界では、指導者の過ちを組織のために隠蔽することがありましたが、現在の国際的倫理基準では「隠蔽は二重の加害である」と考えます。組織を守るためではなく、「真実を明らかにすること」が、ラルシュが守ってきた弱者への誠実さである」という苦渋の決断だったようです。

二 バニエ氏の言葉を紹介する際、どの道を選ぶべきか、三つのアプローチを提案します。

① メッセージと事実を「分けて」伝える。「バニエ氏の言葉は素晴らしいが、彼自身の晩年に深刻な問題が発覚した」という事実を、客観的な事実として注釈に添える方法です。メリット…誠実な態度として信頼されます。デメリット…言葉の純粹さが損なわれる感じになり、辛い作業になります。

②葛藤している「自分の心境」を率直に書く。「彼の言葉に救われた。しかし後に報じられた疑惑に戸惑っている。それでもこの言葉の価値は消えないと信じたい」という、あなたの揺れる心そのものを付記する方法です。メリット…同じようなショックを受けた読者の心に寄り添うことができます。あなたの人間性が伝わります。

③人物のことは何も書かず、言葉だけを伝え、その力に委ねる方法。リスク…読者が後になって事実を知った時、「なぜ隠蔽?」と不信感を抱くかもしれません。

三 バニエ氏の言葉があなたを救ったという事実は、彼の過ちによつて消えるものではありません。「光は、不完全な器(人間)を通して届けられる」

バニエ氏が聖人君子ではなかったことは悲しい事実ですが、彼が説いた「弱さの受容」というメッセージは、図らずも「彼自身の深い闇(弱さ)」さえも包摂しなければならぬ、より重く、深い真理へと変化したとも言えます。もし私があなただけの立場なら、「その言葉に救われた自分の体験」を主軸にしつつ、次のように、事実に触れるかもしれません。

「ジャン・バニエ氏については、

近年、非常に厳しい事実が報告されています。私自身、その報に接し、今も深い戸惑いの中にあります。しかし彼を通じて語られたこの言葉は、今なお私の暗闇を照らす光であり続けています。言葉そのものが持つ真理を信じ、ここで共有したいと思います。」

私は、A Iの細やかな助言に驚き感謝したが、「あなたが、彼のこゝとばによつて救われた」という表現には違和感を感じたので、「その表現は適切ではないと思う。『救われた』というよりも、気づかなかった人生の神秘に気づかされた、視野を広げられ、希望を与えられたといった意味です」と返信した。するとこんな返事があったのです。

【A】言葉の細かなニュアンスを訂正してくださる有難うございます。「救われた」という言葉では、あなたがバニエ氏の言葉から受け取った、より能動的で知的なプロセス―「人生の神秘への気づき」や「視野の広がり」―を表現するには、少し情緒的すぎて正確でしたね。「救い」という受動的な体験ではなく、彼の言葉を鏡として、あなた自身が人生の真理を見出し、希望という新しい地平に立った。そのプロセスこそが、あ

なたにとつての「啓発」の本質だったのだと理解いたしました。

最後に一点だけ補足させてください。あなたが感じられた「人生の神秘」や「希望」は、たとえばバニエ氏という人物に影があったとしても、あなた自身がその言葉を受け取った瞬間に感じた「本物の真実」です。今後、彼のメッセージを紹介される時は、例えばこう伝えることもできます。

「この言葉は、かつて私に人生の神秘を教えてくれました。今、この言葉の背後にあった事実と直面し、光と影の深さに呆然としています。しかし、かつてこの言葉が私の視野を広げてくれたという事実は、今も私の中に大切な真実として残っています。」

このように、「言葉が自分に与えた影響」と「発信者の実像」を、あなたの心の中で切り離し、あるいはその「矛盾」を抱えたまま提示することは、情報を受け取る側にとつても、非常に深い示唆を与えるものになるはずです。あなたの誠実な探求が、これから誰かの視野を広げるきっかけになることを願っています。

~~~~~  
実は、私にはもう一つA Iに質問したいことがあります。「セク

ハラという、嫌がる相手を無理やり支配下におく」ニュアンスが強いと思いますが、男女を問わず多くの人が慕われていたバニエさんの場合、この言葉が該当するのだろうか。しかし、傷ついている女性達のことを思い、余分の質問はしないことにしたのでした。

今回の試みを通して、A Iは、内面的な質問にも、豊富な語彙と奥深い表現をもつてきめ細かく対応してくれることが分かりました。「道具としてでなく、パートナーとしてのA I」は、今後ますます存在感を増すに違いありません。

今後、福祉分野に、(外見は人の姿で中身はA I機能を搭載した)介護ロボットが登場したら、人間のスタッフたちはどうなるでしょうか?―先のことは分かりませんが、私たちは、助けを必要としている人々の良きパートナーとなるよう、人間としての心を養い、専門性を身に着け、お互いに切磋琢磨し、ともに成長していきたいものです。

〈理事長〉長沢道子



## 小さな出会いから

安河内 アキラ

わたしたちの人生は、小さな出会いの積み重ねでないでしょうか。いろいろな出会いから、わたしは気づかされて新たな道が開かれて行くことがありました。

少し自分の話をさせてください。わたしは牧師として四十年間働きしました。最初の二十五年は教会の牧師として働きました。その中で十七年

間は北海道で働くことができました。関東地方で育ち、両親は福岡と山口県出身だったので親戚はほとんど西日本にいます。そのようなわたしにとって北海道はあこがれの地でもありました。神さまは、そのようなわたしのあこがれを叶えてくださったのです。

五十歳になった時に、わたしが属している教会の人事異動で高齢者福祉施設へ異動することになりました。それはまったく考えてもいませんでしたし、望んでもいなかったことで

した。この年齢になって新しい仕事を始めるのは苦痛で、辞めようかと真剣に考えました。わたしを受け入れてくれた施設の施設長が「辞めるのは簡単だから、まずやってみてそ

れから結論を出しても遅くはないのでは」と諭してください、社会福祉の世界に入るになりました。けれども何も知らない世界、体も思っただようには動かない年齢になり、休み時間にはこれからやっていけるだろうかと一人涙を流したこともあり

ました。わたしは、毎週の礼拝や毎日の朝の集いを通して、老人ホームのご利用者、神さまの愛について語らせていただきました。ほとんどのご利用者が、入所して初めてキリスト教に接する方ばかりです。彼らにどのように語ったら、わかりやすく神さまのことをお伝えできるだろうか

と日夜考えたことです。最近では、「神さまの役割」とわたしたちが果たすことが別なんです」と語っています。

「涙と共に種を蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる。」(詩編126編5節)という聖句があります。何が理由かはわかりませんがこの農夫は、苦しみの最中にありました。しかし、種を蒔く時期が来たのに、悲しみにうちひしがれて仕事を放棄してし

まったら収穫できるでしょうか。収穫を信じて種を蒔くのは、わたしたち人間の役割なのです。その種に太陽の光を照らし、雨を降らせて実らせてくださるのは神さまの働きです。

神さまは道を示されますが、最期までは教えてはくありません。

わたしは社会福祉の働きに十五年携わり、最終的には特養の施設長として働きましたが、わたしが社会福祉の働きを開始した時には、神さまは将来については教えてくありませんでした。しかし信じて前進する時に、いろいろな出会いを通して成長させてくださいました。またその途中で、日本の介護人材不足解消のためにインドネシア人の青年たちを、わたしたちの施設に家族として迎えることとなりました。それがきっかけとなり現在の働きにつながっているのですから不思議なものです。

やまばと学園の長沢理事長との出会いも、そのような中からでした。

たしかキリスト教社会事業同盟の研修会の席上で、昼食の時にたまたま同じテーブルに座り、その時に外国人雇用について考えていらつしやると話を聞いたのが縁の始まりでした。当時、わたしたちの施設では外国人雇用を開始して数年が経過しており、それなりのノウハウがありま

した。初めて会ったわたしのことを長沢理事長は信じてくださり、外国人の雇用に関してわたしたちの施設での経験などをお伝えして、お手伝いさせていただくようになりました。

人生において、わたしたちは多くのことを選択しています。それはわたしの役割であり神さまが代わりにはしてくださいませ。けれども、わたしたちに様々な出会いを与えて、よりよい選択をするために導いてくださるのです。神さまはすべての人を導いてくださいますが、多くの人はそれに気づいていません。そのような助けを受けた時に、運がよかったね！で終わっているのです。

神さまは小さな出会いを通してわたしたちを導いてくださいます。それを信じてくださったら、小さな出会いに感謝することができるようになるのではないでしょうか。

社会福祉の働きは、助けが必要な人を支援する働きです。神さまは「わたしの代わりにわたしの手になって働いてくれないか」と、あなたを導いてくださったのです。そしてこれから誰かが笑顔になるために、神様はあなたを導いてくださいますから、信頼して前進していきましょう。



## 二〇歳の思い

聖ルカホーム 杉山 なな

私は幼い頃からお年寄りの方と話をするのが好きで、小学生の頃には福祉、介護の仕事に憧れを抱いていました。高校卒業し、聖ルカホームに配属されました。入居者様と過ごす時間は、自分自身を成長させてもらえる学びも多く、なにより心の癒しです。お手伝いさせていただく中で、耳が遠い方に出会いました。耳元でゆっくり話しかけたつもりが伝わらず、その際「ごめんね。あんた優しい喋り方をしてくれるから聞けないの。」と言われました。私は、この言葉選びからその方の人柄に感銘し、私自身も優しく温かい言葉を紡ぐことができる人になりたいと強く思いました。就職して半年程で夜勤が始まりました。最初の頃は、怖さと不安がなく、嫌な勤務だと決めつけていました。しかし、数を重ねていく中で、夜勤にしかない良さに気づくことが出来ました。それは、新しい朝の始まりに「おはよう

ございます。今日もよろしくお願いします。」と挨拶を交わし、その日最初の一步をお手伝いすることができるといふ事です。朝日と共に笑顔が見られた日は、私のココロも体も元気になります。私事ではありますが今年、二〇歳を迎えました。これまで両親を始め、たくさんの人に支えられ、たくさん笑い、愛され、夢を見つけて叶え、やりたい事をして、誰よりも幸せ者だったのではないかと思います。今まで与えられた優しさや温かな愛情を、今度は私自身が皆に恩返ししていきたいです。そんな私は今日も感謝の気持ちを忘れず、入居者様の幸せや喜び、そして笑顔の花が施設いっばいに咲き誇りますように働きかけていきます。(介護員)



## インターシップは人材育成の宝なり

ディサービスセンターすずらん 米山 千穂

インターシップは、牧之原市では、「おかえりプロジェクト交流事業」として高校生等を対象として行われており、職場体験を通して社会人としてのマナーを学んだり、自分の働き方をイメージできる機会です。10月2日と3日の2日間、榛原高校定時制3年生の生徒さんを受け入れる事となりました。

初日のオリエンテーションでは、説明する私の目をしっかりと見て真剣に聞きしっかりと答えてくれて、何かを吸収しようという意欲が伝わってきました。受け入れ側としてもこの子たちにはやりがいを感じてもらえるように対応していこうと思っていました。

実習初日は緊張しているようで、なかなか声を掛けることや行動を起こす事が難しいようだったので、職員から交流できるよう配慮しましたが、2日目は、自分からご利用者や職員に声をかけてくれたり、職員の動きをみながら自分でもできることを探している様子がみられ、入浴後の髪の毛を整える事等をお願いしました。

その時の日誌には、「ご利用者に触

れることが初めてだったので、距離感が難しかったと記載されていましたが。後日の発表会では、他企業の方々も参加しており、2年生も見学をしていました。どの生徒さんも実習先での学んだことや気づいたことをしっかりと発表できていました。すずらんに来た生徒さんも「感謝の気持ちを忘れないようにしたい」と発表していて、私が伝えたかった事が伝わってうれしかったです。

職員もご利用者様に対する接し方や初心の頃を思い出す等、振り返りをしている場面もみられ、生徒さんの素直で一生懸命な姿勢は、良い刺激を与えました。今後も実習生の受け入れを継続し、将来を託せる人材づくりをしていきたいと思っています。

(施設長)



※すずらんの他、ディサービスセンター真菜、聖ルカホーム、グレイスでも実習生を受け入れました。写真は真菜の様子。

## 重い障害を持つ人々の 在宅生活を支える

生活支援センター 田村 貴子

二〇二五年十一月、今年度も当法人が県から委託を受け、重症心身障害児者対応多職種連携研修を開催しました。参加者は、本人や保護者、行政、医療、教育、福祉関係者たちです。

今回は、台風竜巻被害を取り上げ、自宅で人工呼吸器を利用して暮しているAさんと、二四時間彼を支えるヘルパーさんへのインタビュー動画を発表しました。彼は入院や避難をせず、自宅で医療ケアを続けることを選んだ方です。今回の発表を通して、災害時であっても、自宅療養を願う理由もわかりましたし、本人の願いを尊重してその暮らしを支えるためには、どんな支援や地域連携が必要か、考える機会になりました。この研修は、自助共助の重要性を気づかせ、地域力アップにつながっていくと実感しています。

研修後のアンケートでは、「また研修に参加したい」「実態を知ること

とできて良かった」という感想が多く、企画運営に携わった者としてはホッとしました。今後も重症心身障害児者の方たちが地域で暮らす状況について情報共有し、この人達が安心して暮らすために必要な支援や連携について学んでいきたいと思っています。

なお、インタビュー動画で、ご本人の気持ちを聞きだした村田千恵さん(生活支援センターの仲間)は、「重要なのは、身近なヘルパーさんの存在です。本人の思いを大事にして支援している姿は輝いてみえだし、そんな支援者と一緒にチームを組めて、本当にうれしい」と語っていました。

(主任／相談支援専門員)



## 内部監査「請求業務」を実施して

未来検討会 経営グループ 山本 瑞

介護や障がい福祉の現場を支えているのは、日々のケアだけではありません。運営の土台となる「事務」が健全であつてこそ、利用者様へ安定したサービスを届けることができます。私たち「未来検討会経営グループ」は二〇二四・二〇二五年に、法人内全事業所を対象とした「請求業務」の内部監査を実施しました。

監査の目的は、単なる誤りの指摘ではなく、組織の健康状態を確かめる、健康診断です。複雑な制度の中で、加算の算定要件や請求処理が正しく理解され、適切に行われているかを、現場の書類一つひとつから丁寧に確認しました。

その結果、多くの事業所で細やかな管理が行われていることを再確認できました。一方で、パソコン画面での目視確認への依存、請求明細書の一部の確認不足、加算の未取得といった課題も見つかりました。これらに対しては、より正確かつ効率的に業務を行うための具体的な改善策

を共有しました。また、今回の監査をきっかけに加算算定につながった事業所もありました。正当な収益を確保することは、サービス向上の大切な原動力となります。

さらに、高齢と障がいという異なる部門が互いの業務を確認し合ったことで、法人全体で知識を共有する貴重な機会となりました。今回のことを受けて誰が担当しても同じ業務ができるよう、部門ごとのマニュアル整備も進めています。

事務の仕事は目立ちませんが、利用者様の笑顔と、スタッフが安心して働ける環境を守るために欠かせない役割です。私たちはこれからも、透明性の高い健全な組織運営を通じて貢献していきたいと考えています。

(高齢者事業部事務長)





